

世の中には、『瓢箪から駒』ということがある。 あるいは、『ウソからでたマコト』? もしくは、『青天の霹靂』(ちょっと違うか?) ひょっとしたら『下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる』(全然違う!)

去年の夏、なにを思ったか うちの奥さんが一人でタイに出かけてしまった。 いや、向こうに知り合いがいて、遊びにおいでと誘ってもらったからなのだけど。 帰ってきたら、妙に活性化されていた。

奥さんは、昔から、エジプトにあこがれており「エジプトに、行きたいけれど、 エジプトは、あまりに遠し」(ニセ朔太郎) などと言っていたわけだけど、 タイから帰ってきたある日、彼女が宣った。 「わたし、エジプトに行って来る」 「はい?」 「だから、冬休みの子供の面倒よろしく」 「え? あの……」

エジプトといえば、世界最古の文明を持ち、 古代七不思議のうちたった一つ残ったピラミッドを有する国。 わたしだって、行きたくないわけがない。 (子供の面倒がメンドウということは、おいといて・爆) 「えっと、僕も行きたいけど」 「じゃあ、一緒に行く?」

……というわけで、 まだ、ツアーも捜していない状態だったわけだが、 あれよあれよという間に、エジプト行きが既定事実に。 まさに、「瓢箪から駒」 思いもかけなかったことになったわけである。

それが9月のこと。 さっそく旅行計画を立てないといけないわけだが、 ヨーロッパやアメリカなら航空券だけ取って自由旅行する自信があるが、 さすがにエジプトでは無理そう。

なので、ネットを中心にツアーを捜して良さそうなものに予約を入れた。が、しかし、すでにすべてのツアーがキャンセル待ち状態。 日本のツアー恐るべし。4ヶ月前では遅いらしい。 しかし、待つこと1~2週間。 キャンセル発生でいけることが確定。

かくして、冬休みエジプト旅行が決まったわけである。

エジプトというと、みなさま、どんなイメージでしょうか?

ピラミッド

スフィンクス

ミイラ

ナイル川

砂漠

etc

たぶん、そのどれもが、いわゆる文明をうんだ古代のエジプトに連なるものだと思います。 では現代のエジプトは?

僕の受けたエジプトの印象は、まあ一言でいうと……

エジプト人、恐るべし!(古代のエジプト人も今のエジプト人も)

いろんな意味で、すげーわ。この人ら。

というもんなんだけど......

いや、待て。

まだ、ヒコーキにも乗ってなかった。

さて、年末。

子供たちの終業式も済まないうちに(終業式の日は休ませた!)羽田から関空へ。

今回のツアーは関西発某○TBツアー。

帰ってきたら実家の大阪で休むつもりなので、それを考えて関西発の旅程に。

関空を真夜中前に飛び立ち一路西へ。しかし、直行ではない。

12時間ぐらい乗ったとこで、クウェートのドーハに降り立った。

ドーハといえば、サッカー好きなら知らない人がいない土地。

かのアメリカワールドカップ予選最終戦。

ロスタイム。

左サイドからの相手のコーナーキック。

ショートコーナーに寄せに行くカズ。

そのカズがかわされクロスが入ってきて、

ヘディングされたボールがふわっとあがる。

それはそのまま吸い込まれるように日本のゴールへ。

ベンチのイスから崩れ落ちるゴン中山。終了のホイッスルに座り込む選手たち......

そう、あのドーハの悲劇で忘れられないところなのだ。

そのドーハでなんと5時間のトランジット。

えー?! 外でれないかなあ? スタジアム見に行きたいぞ!

とか思ったが、当然だめで、そのままじっと空港の中で乗り継ぎ待機だった。

思えばこの時はまだ元気だった。

帰りもドーハで長いトランジットだったけど、その時は死にかけてた(笑)

さて、ドーハの昼(日本より6時間の遅れ)の飛行機で、ようやくエジプトに向けて出発。

エジプトでの最初の目的地は、地中海の都市、アレキサンドリアである。

エジプトツアーでは日程に余裕がないと組み込まれないことが多いが、この街は、かのアレキサンダー大王がつくり、クレオパトラがいたエジプト最後の王朝・プトレマイオス朝の首都だった街である。

実はアレキサンドリアはちょっと思い入れのある街。

なぜかというと、今ひそかに考えている古代の地中海地方を舞台としたお話にでてくる予定の 街だからだ。それを、この目で見れるのならば、とってもうれしい。

4時間ぐらい飛行してようやくアレキサンドリアに到着。

日本出発からはや23時間。丸一日掛けての入エジプト。

エジプトは、やはりはるか遠かった。

でも、そのままバスに乗ってアレキサンドリアの町中を離れ、西に約40分。その日はホテル に直行であった。

ホテルに着いたのは夕方。地中海のまっ前に建つホテルから、歩いて砂浜へ。



(ホテルからの眺め)



(地中海! ちなみに日付が23日になっているけど、日本時間です。エジプトではまだ22日)

白い砂浜。明るいライトブルーの地中海。少し強めの風に香る潮の香り。 長旅にぐったりしていた体もようやく生き返って、うれしくなってきた。 「この海の向こうにヨーロッパが広がってるんだぞ!」 などと子供に言い聞かせて、嬉々として写真を撮っていたわけだが、 後で考えると、指さす先にあるのは、ヨーロッパではなくトルコだったはずで、 まあ、子供たちよ、そんな間違いもあるさ。

気にしない気にしない。ケセラセラ。ケセラセラ。と。(いきなりヨーロッパ調)

さて、ようやくたどり着いたエジプトはアレキサンドリア。 そのアレキサンドリアには何があるのか?

もし、わたしたちが、紀元前一世紀のアレキサンドリアにいたならば、 人類史上の二つの奇蹟を目にすることが出来たはずである。

その一つは、アレキサンドリア図書館。

紀元前300年頃、プトレマイオス一世が建立し、紀元前一世紀には60万冊を越える蔵書を有していた。

その当時、そんなに多くの本があったのは、地球上でここだけである。

本が知識を宿すとすれば、それはここが、地球上の知の中心であったことを意味する。

実際、数学者アルキメデスや幾何学のユークリッドが利用し、

地球の大きさを測ったエラトステネスが館長を務めたといわれている。

もし、僕がその場にいれば、悦悦として朝から晩までパピルスや羊皮紙に書かれた書物を読 み漁ったことだろう。

本好きの極楽である。

なんでこんなに本が集まったかについては、図書館を利用するものは必ず一冊の本を寄贈しないといけなかったらしく、それなら僕はつたない自分の書いたお話でも寄贈して物語作者として歴史に名をとどめたかったりして(笑)

その図書館も、クレオパトラ女王の時代、彼女とジュリアス・シーザーの関わった戦いの火の 粉のため、灰燼に帰すのである。

逃げまどう人々。ローマ軍の侵攻。紅蓮の炎に焼かれる100万の書物。

その中で、少しでも本を持ち出そうとした関係者もいただろう。物語を書く者としては、とて も魅力的な場面である。

そのアレキサンドリア図書館は、近年、世界各国の協力によって近代的な図書館として再建されている。

その外観がこれ。現代の英知の殿堂になってもらいたいもんだ。



さて、もう一つの奇蹟はというと、それは……アレキサンドリアの大灯台だ。

エジプトに2つあった古代七不思議のうちの一つ。ギザのピラミッドと並ぶ建造物。

高さ140メートル。4層からなり、一番下の層には180もの小部屋があった。その光は、60キロ先からでも見えたといわれている。

またの名をファーロス島の大灯台。ファーロスは、イタリア語やスペイン語ではそのまま「 灯台」の意味になる。

この建造物は中世まで建っていて、ピラミッド以外ではもっとも長く残った古代七不思議なのだけど、2度の地震で倒壊してしまった。

今、その後には、中世に立てられた要塞(カート・ベイ要塞)が立っている。



この要塞の石には、灯台の石がそのまま使われているそうだ。

というわけで、現代のアレキサンドリアにはそれらは存在しないのだけど、十分歴史の息吹に 触れた気がした。

さて、では、実際にアレキサンドリアでは何を観光したかというと、一つは、カタコンベ(地 下墓地)

地下深くにいくつもの石棺の入っているローマ時代の共同墓地があり、その壁にエジプトの神 様が描かれているというもの。

もう一つは、「ポンペイの柱」といわれる一本の柱。



由来は、ちょっと説明しづらいのだけど、関西弁を操るエジプト人のガイドさんの話では、 昔ローマ時代にアレキサンドリアの人々が反乱を起こし、それに対してローマ皇帝が寛大な処 置をしたことに対して、アレキサンドリアの住民が感謝を示すために建てたといわれていた。

実はそれよりも、このポンペイの柱の立っている場所が、それ以前はクレオパトラ女王が建て た宮殿があったという方に興味惹かれてしまった。

それは、クレオパトラとシーザーの間に産まれた子供シーザリオン(またはカエサリオン)の ための壮麗な宮殿だったらしい。その宮殿もクレオパトラの運命と共に崩れ落ちたわけである。

さて、さっきからクレオパトラ女王のことが何度か出てきてるけど、

昔から絶世の美女、『彼女の鼻が少し低ければ歴史は変わっていた』かもといわれる人物。 映画などでは、よく黒髪ストレートの褐色の肌の女性として描かれている。

でも、それはたぶん間違っている。

そもそもクレオパトラの王朝はプトレマイオス王朝といい、

それはアレキサンダー大王がエジプトを征服した後、若くして亡くなり(31歳ぐらいだったはず)

その後に、彼の軍団の指揮官たちによる後継戦争の結果、エジプトをおさめたのがプトレマイオス一世だった。

彼は生粋のギリシャ人(またはマケドニア人)。その妃もギリシア人だった。

だから、その後継のクレオパトラ女王も、白い肌と金髪の美女だったはずなのである。

その彼女の色香に、ローマのジーザーやアントニウスは惑わされ、

年若のオクタビアヌス(後の皇帝)は踏み止まったわけだある。

ローマ側に立てば天下の妖婦だけれど、エジプト人には、己の身一つでエジプトを守ろうとした女性として、いまでも人気がある。

そんなことをつらつら考えながら、昼からビール。 銘柄はこれからたびたびお世話になる「ステラ」であった。



ちなみに、今回の旅行では、朝食以外は食事時の飲み物は注文制で、その分お金がかかった。 ビールはだいたい5ドル程度、ジュース2~3ドル、ミネラルウォーター1ドルだった。

(昼食レストランの屋上からの地中海の眺め)



午後には、さらに考古学博物館を見学。



(博物館の玄関)

ここでは、この後何度も見ることになるエジプト的彫像の一端に触れたのだった。

アレキサンドリアでの観光を終わって、一行は一路バスでいよいよカイロへ。 カイロの北西、ギザ地区には、かのクフ王のピラミッドなどの三大ピラミッドが存在している

アレキサンドリアからバスで3時間。カイロに到着したのは、夕闇迫る頃。 バスに揺られて、みんな寝ているのか静かだった車内が一瞬ざわめく。 見ると窓の外、夕暮れの中にピラミッドの先頭の姿が見えてきたのだった。



おー! 本物のピラミッドだ! ちょっと感動。 車内からその姿を見ながら、しかし、この日はそのままホテルへ。 ピラミッド観光は翌日からなのであった。

かわりに、カイロの町中の様子など。 カイロは東京に並ぶ人口を持つ大都市である。 バスの走った道路の車線(ホテル前の道路)は片道3車線あった。



(ホテルからの眺め)

ところが、カイロに入ったとき、そこに車がひしめき合っていた。

夕暮れのカイロは大渋滞。

信号の変わるのが待ちどうし……て、あれ? 信号は? ありませんがな(笑) いや、ほんとに信号無いんですよ。というかあっても動いてない。

停電が多いこともあって、たいてい交通整理のお巡りさんが立っています。

だから、あっても誰も守らないらしい。

横断歩道だって機能してません。

じゃあ、どうやって道を渡るのかというと、みんな、走ってくる車の間を縫って渡ってます。 男も女も、大人も子供も、おばあさんだって、走ってくる車を見ながら悠々と道を横断している。

いや、すごい。エジプト人恐るべし!

ところで、昔、サッカーのユース世代の世界選手権がアフリカでおこなわれたことがある。 この時、日本は小野や高原や稲本を擁し、準優勝したわけだけど、

その時、監督だったトルシエは、街に出た日本の選手たちが車が一台も来ないにも関わらず赤 信号を守っているのを見て、

「なぜ、おまえたちは渡らないんだ?! サッカーではみずからの判断でリスクをおかさなければ勝てない!」

と怒ったというが、それならば、エジプトでは60歳のおばあさんであっても日本人よりサッカーが強そうである。

実際エジプトは大陸チャンピオンになったこともある強豪だ。

ちなみに、この旅行中ほとんどバスの移動だったのだけど、その途中の道で裸足でサーカーボ

ールを蹴っている少年たちを何度かみかけた。

サッカーをやっているうちの下の子に、リフティング勝負でもしてきたら? と声を掛けたが 、恥ずかしがってよういかない。

まあ、うちの子が世界で活躍するのは夢のまた夢だろうな。

さて、そんな車だらけのカイロの街には、案に相違して荷物を曳くロバが普通に道を歩いていた。

渋滞の道でも構わず何台ものロバの荷車が通っていく。

いや、すごい。現代と中世が混在している。

恐るべしエジプト人。

そんな感慨を強くしたカイロ入りであった。

エジプトの行ったら何を見たい?

と聞かれたら、たいていの人が「ピラミッド」と答えると思う。 そこで「スカラベ」とかいうのは、ファーブルさんだけだと思うし、 まして「パピルス」とか答えるのはマニアックすぎる(いや、どっちも実は見たいと思うけど ・笑)

僕もやっぱりピラミッドが一番見たかった。

なんたって現存する唯一の古代世界七不思議。そりゃあ、一度この目で見てみたいでしょう?

さて、この日は、いよいよピラミッドとご対面の日である。 朝からわくわくしながら、カイロの北西にあるギザ地区へ。 そして、ついに……来た、見た、たまげた!



で、でかいです! クフ王の大ピラミッド。高さ130メートル。先頭は見上げる彼方。 よくこんなもん人力だけで造りましたね? 古代エジプト人さん。 すごすぎます。脱帽です。

しかも、今は表面が岩の段差でがたがたしているけれど、

造られた当時は、最後に三角柱形の大理石の化粧岩が乗っており、

表面は真っ平らでつるつる。大理石の白色に輝いていたという。

その姿を想像するに、綺麗すぎる!

そりゃ、そんなもんが砂漠の中にあったら、世紀の不思議と思うに決まってるよな。

今でも、その大理石の化粧岩は一番基底部に残っていました。

さっそく、ピラミッドの中の通路を通って玄室まで。

中は最初腰を落として屈まなければならない狭さ。ちょっと腰痛の身には少々きつい。

それをすぎると天井の高い通路に出て、その先に広い玄室があった。

落とし気味の暗い照明の中、今は石棺だけが残っている玄室は、

壁の石組みに隙間一つなくぴったりと組み合わされた、高い天井を持つ長方形の空間だった。 中はけっこう暑い。

後で見たツタンカーメン王の副葬品などのことを考えると、

この部屋の中に、当時は山のような副葬品が詰まっていたのだろう。

そのほとんどが金か金張りだったはずだ。

その全ては盗掘で失われてしまったわけだけど。

僕らは、今、中に残る意外と小さな石棺なんかを確認して、外へと出たのであった。

それから、ピラミッドの外周をまわる。

一辺が約230メートル。途中にある小さなピラミッド(クフ王のおかあさんのもの)の上 に登ったり、

ピラミッド横から掘り出された巨大な舟(太陽の舟)を下から見上げたりしながら、ゆっくり2 0分ぐらい掛けて一周した。

改めて、よくこんなものを造ったなあと感嘆。

さて、クフ王のピラミッドの後は、隣にある第二ピラミッドと第三ピラミッドへ。



(第2ピラミッド・上方には化粧岩が残っている)

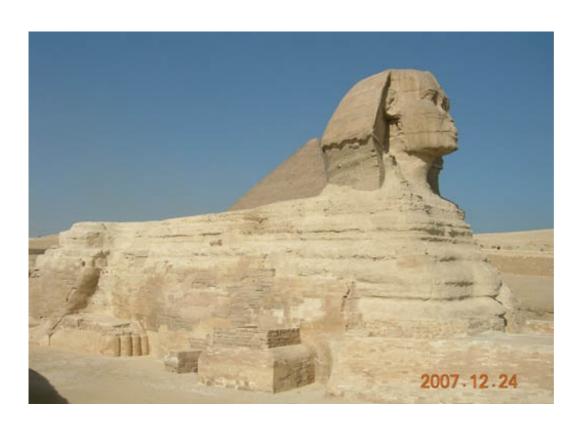
合わせてギザの三大ピラミッドと呼ばれている。



さて、その後には……例のあれである。 大きなネコ、もとい、大きなライオンのスフィンクス像。 この像は第二ピラミッドからつづく参道の入り口当たりに位置している。



これまたでかい。ただし、ピラミッドを見た後では、それもそんなに大きく思えないから不思 議である。



後ろから見ると、尻尾は体の右側にまわされていた。何ともかわいい。

そうそうところで、出発前に、スフィンクスはカーネルサンダースさんとにらめっこしている んだと誰かに教えられたのだけど、そのケンタッキーはたぶんこれ(笑) 中に入りはしなかったけどね。



(スフィンクスの後ろから撮影)

午後からは、カイロの南30~40キロの辺りにある複数のピラミッドを見て回った。

まず、最初にこれは屈折ピラミッド。



途中から傾斜が異なっている。

何でも途中で完成を急いだからとか、そのままの角度だと崩壊の怖れがあったからとか、いろいろ説はあるらしい。

次にこっちは赤ピラミッド。赤花崗岩で出来ている。



このピラミッドには、中に入った。

これまた狭い通路、最初40メートルぐらい下降して、それから上昇する通路を抜けていった 玄室は、暑い上にアンモニア臭かった。

しかも戻るときには、今度は40メートルを腰をかがめながら登るわけで、えらいしんどい。 暑さで汗がだらだら出てきて、穴から出たときには汗だくで、さらに膝が笑っていた(弱!) でも外を吹く風が心地いい。

と、ここでわたしは理解した。

ピラミッド観光は、つまり、フィールドアスレチックなのだ。いや、マジで(笑)

最後に見たのは、階段ピラミッド。このピラミッドが一番最初のピラミッドらしい。



ということで、この日は実にピラミッド三昧の日であった。 満足。



(カイロに戻る途中・椰子の木陰に沈む夕日)

ピラミッド観光の夜は、プチ・ナイル川クルーズだった。 だいたい 2 時間ぐらい。夕食を食べながら、音楽とダンスを楽しむのである。

(観光船)



さて、エジプトなどアラブ世界でダンスというと、ベリーダンスが思い浮かぶ。



例えばこんな光景......

砂漠のオアシスにある安い酒場。 夜な夜なあやしい人々が集う酒場の舞台では、 今まさに、薄い衣装を身につけた踊り子の美女が

なめらかに体を動かして踊っている。

それを横目で見ながら褐色の肌の青年が仲間に何事かささやいた。 ささやかれた者が音もなくテーブルを離れる。

青年はグラス一杯の葡萄酒を飲み干し、再び踊り子を見つめると、 人知れず不敵な笑顔を浮かべた。

彼の名は、アリ・バーバというのだった(笑)

(<- 実際には、こんなのだった)

実際に見たベリーダンスは、まあ、それほどでもなく(爆) それよりも、男性ダンサーの、モノをもってくるくる回る踊りの方がおもしろかった。

(恐怖の独楽男と命名)



さて翌日。 この日のメーンは、カイロ博物館の観光。



(博物館の正面)

この博物館には、かのツタンカーメン王の墓から出てきた副葬品が展示されている。

ツタンカーメンはエジプトの王としては、ほとんど名を残していない。それもそのはず、わずか19歳で死んだのだ。

あとで行ったルクソールの王家の谷にある彼の墓も、他の王たちのモノに比べればごく小さかった。

それなのに、盗掘を免れたその墓から見つかった副葬品は、3000点とも5000点ともいい、広いカイロ博物館の2階部分の大半を占めていた。

もし、もっと有名な王の副葬品が盗掘されずに残っていたら、博物館があと3,4つは必要だったんじゃないだろうか?

それはさておき、その副葬品の中で心に残った物をあげていくと、まず、厨子(ずし)。

それは石棺をおさめていた建物なんだけど、4重の入れ子構造になっていた。

一番外側の厨子は、ちょうど小学校の校庭にある用具入れの倉庫ぐらいの大きさ。

それが木製金箔張りで、様々な神様の絵が描かれている。

その中に少し小さめの同じく木製金箔張りの厨子があって、さらにその内側に……といように 4重に。

その豪華さ!

残念ながら博物館の中では写真が撮れないので、うまく伝えられないけれど、まるで金閣寺が 複数あるような感じだ。

その厨子の中には石棺があって(この石棺は王家の谷においてあった)

その中に今度は人型の柩(ひつぎ)が入っている。

この柩も3重構造で、一番外側(これは王家の谷)と2番目は木製金箔張り。

そして、最後の3番目は純金製(!)である。

すごいわ、これ!

そして、その中にツタンカーメン王のミイラが入っていたわけだけど、

そのミイラがまた黄金のマスクをかぶっていたわけだ。

そのマスク、歴史の教科書なんかで見たことがある人も多いと思う。日本にも一度来たらしい

実際に見てみると、すごく精巧に作ってあって、

それは実際にツタンカーメンに似せてつくってあるわけだけど、まるで生きてその姿を見ているような気になる。

おもしろかったのは、後ろから見た姿。ふわっと広がった髪の形に作られている。

「後ろからのマスクを見た人はそうはいないかも」

と奥さんと話しながら、360度ぐるっと黄金のマスクを見たのである。

その他には、副葬品として黄金の玉座があった。

それほど大きな物ではなく、むしろパイプイス程度の小ぶりなもの。

でも、その背もたれの部分にツタンカーメンとその妃アンケセナーメンが彼に香油を塗っているさまが描かれている。

その絵がすごくいい。

ふたりの仲むつまじさがよく表されている。

そして、ミイラの胸元に置かれていたという、3000年前の花束。

発見者のハワード・カーターがそれを手向けたであろう王妃を思って一番感動したというその 花も展示されていた。

すごいよねえ、エジプトって。だって、ほっとくだけで花束が、ドライフラワーになっちゃうんだよ(そっちか!)

そのおかげで3000年経っても僕たちはその花を見ることが出来るんだけど。

さて、他にもこの博物館では、歴代の王のミイラを見ることが出来た。

有名なラムセス2世とか、最近同定されたハトシェプト女王のミイラだとか、全部で20体以上展示されていた。

そんなこんなで、まだまだみたりない気分で博物館をあとに。時間があったらもっと見ていたかった。



ちなみにこれは博物館の前庭の池。

水に浮かんでいるのは蓮で、茂っているのがパピルス(!) 実は蓮とパピルスは古代から、それぞれ上エジプト(ナイル川 上流地域)と下エジプト(下流地域)の象徴とされている。

そしてこの二つの地域の統合からエジプトの歴史が始まるのだ

それは今から5000年ほど前のこと。

いろんな神殿のレリーフにも、この二つの植物の結びつきを表す(つまり上下エジプトの統合を表す)レリーフが彫られていたりする。

ここで、ついでにパピルスについて述べてみよう。



<ー これがパピルス

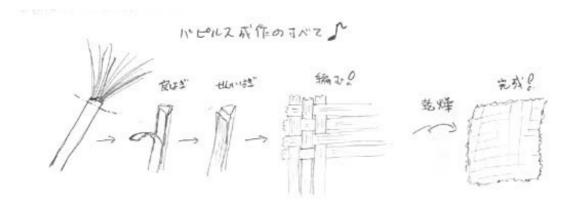
カイロではパピルス屋(?)に行って、紙作りの行程を教えてもらった。

これが現代の紙作りとは全く違う。

今の紙は中国の蔡倫が発明したといわれる植物の繊維をいったん水の中でバラバラにして、それから梳いていくというものだけど、パピルスはむしろ竹細工に似ている。

まずパピルスの三角形型の茎の青皮を剥くと、白い繊維が出てくる

それを薄く裂いて、格子状に重ねる。 そしたら、それを布に挟んで重石をして幾日。 乾いたら、それはもう紙になっている。



紙作り工程(笑)と出来た紙



ひえ~。そんなのあり? バラバラにならないの? と思うのだけど、 ちゃんと乾いた繊維は最初から一枚だったように重なって折り曲げても大丈夫。 これは、パピルスっていう草がすごいとしかいいようがないね。 ちなみに、よく観光地で物売りのアンちゃんがパピルスの偽物を売ったりしてるわけだが、 それはバナナの繊維で出来ているらしい。

だからエジプトでは白いそれも、日本に持って帰ると湿気のせいで黒く変色するらしい(笑)



(ゲットしたパピルス。古代エジプト人の宇宙図が描かれている)

さて、エジプトでは観光地に行くと何処にいっても物売りに出会う。

大抵、絵はがきだとか一枚物のガイドブックやらを両手に持って、

「ワンダラー、ワンダラー(1ドルのこと)」

と言って寄ってくる。

大人もいれば、子供もいたりする。

ちゃんとお店が在っても、店の前で商品を手に

「ワンダラー、ワンダラー」とやってくる。

例の偽物のパピルスをもって「ワンダラー」とやる人もいるし、

一度など、白い民族衣装をもって「ワンダラー」と言うおっちゃんもいた。

え? 服が100円ですか? いいのか?

さらに、こちらが取り合わないでいると、そのうち、

「フリー、フリー」とか言いだす人もいる。

いや、タダはまずいだろう? タダは(笑)

また、頻繁に、ジャパニーズ?とか、チャイニーズ?とか訊かれるが、

日本人とわかると片言の日本語で話してくる。

一番よく聞いたのは、「がんばれ。がんばれ」

たぶん、日本人のツアー客が忙しい日程でへばってきて、お互いに励まし合う光景がよくある のじゃないか? と思ったり。

よくわからないのは、「やまもとやま~」と言う言葉をよく掛けられたこと。

なんで山本山? しかも、古すぎ!

仕方がないので、カイロのモスクを見学していたとき、

寄ってきた物売りの兄ちゃんに、(当時の)最新の日本語の流行を言ってみた。すなわち、

「そんなの関係ない!」

すると驚いたことに彼はその言葉を知っていて、アクションをつけて連呼してくれた。

う~ん。エジプトの物売り、侮りがたし。

僕らはパチパチと拍手した。でも、なんにも買わなかったけど。

だいたい、今回のツアーは関西発。

と言うことは、参加したのは大阪やその近郊の人たちがほとんどなのだ。

するとどうなるか?

みんな無駄なお金は使わない。

例えば、旅行中2度全員で写真を撮ってもらったことがあった(一度はスフィンクス前)の

だが、その写真を誰も買わなかった。

この日、カイロでの最後の夜はオールドカイロのハーン・ハリーリ・バザールの観光というか、お買い物タイム。

このバザールに定価なんてものはなく、値段は交渉で決まるわけだが、そんなの関西人にはお 手のものである。

ある人はおもちゃの楽器の値段を20ドルから7ドルにまけさせた。

また、ある人はお土産のナツメヤシのお菓子を半額にした。

かく言う、うちの奥さんも、香辛料のサフランを最初一袋5ドルと言われたのを結局3袋、4 ドルでせしめていた。

まあ、エジプト商人には災難な団体である。

ちなみに僕は買い物交渉にはあまり付き合わず、なにをしていたかというと、 実はネコを見ていた(笑)

市場には食べ物も売っているからか、やたらとネコたちを見かけた。



(なんでエジプトで野良猫を撮っているの? と奥さんに怒られた写真)

そういえば、エジプトで始めてみたネコはアレキサンドリアのホテルの外廊下を歩いていて、 それが、ペルシャネコではないけれど、すごく細い足をして長い尻尾をピンと立てた、すごく かわいいネコちゃんだった。

その時力メラを持っていなかったことが悔やまれる。

で、そのあとエジプトのネコちゃんを撮ってみたわけだ(こんなのも)



さて、カイロ周辺の観光はこの日で終わり。

一行はカイロの南アスワンに向かって、夜行寝台列車での移動となった。



(カイロ駅のホームにて)

カイロからアスワンまで800キロ。寝台特急で約11時間の旅である。 でも、まあ時間通りにはいかず、かなり遅れることになったけど。 それは日本以外なら、普通のことだ。

寝台車の一つのコンパートメントには二段ベッドがあって、ふたり寝ることが出来る。

うちの家族は4人なので、コンパートメント間に扉があるコネクティングルームを取っていただいた。

そういえば、言い忘れていたが、この旅行中ホテルの部屋も基本的にふたり部屋のため、我が 家は二部屋で泊まった。

わたしとお兄ちゃん、奥さんと下の子の組み合わせである。

二部屋に別れるのはめんどくさいこともあったが、(朝の荷物出しなど)よいこともあった。 例えば、さすがに日本のツアーなので、ホテルは高級ホテルを利用しているが、

それでも部屋によって水の出が悪かったり、ドライヤーの電源が来てなかったりということがあった。

こう言うとき、二部屋在るのは便利であった。

さて、朝、電車の中からすぎていくエジプトの景色を眺めていた。 電車はおおむねナイル川に沿って走っていく。



川を離れると、そこには相変わらずナツメヤシが茂り、その間に畑が広がっている。



あとで聞いたところによると、サトウキビ畑が多いらしい。 もしくはクローバーなどの家畜の飼料をつくっているそうだ。

また、所々で一般の人の家を見かけるのだが、それが、日本人の感覚からすると掘っ建て小屋に等しい。

壁は昔ながらの日干し煉瓦。時たま鉄筋が入っているようで、壁の上から鉄棒が何本も飛び出 している。

なぜ、そういうことが見えるかというと、つまり、屋根がないのである。

最初、この建物は作りかけなのかと思った。もしくは、反対に解体している途中なんだと。 でも、実はそうじゃない。

カイロなどの都会はともかく、農村では二階建てとかじゃない限り、基本的に屋根がないの だ(!)

あっても、せいぜいナツメヤシの葉っぱで被っていて、所々に重石がのっている。

それって、いいのか?!

確かに、日本でも昔は茅で屋根を葺いていた。それにしても厚みは30センチ以上ある。

だって、雨が降ったら漏れてくるじゃないか、と考えて、思い当たった。

雨は、降らないのである。

エジプトの南は基本的に雨が降らない。

アスワンなんて20年以上一滴も降らなかった記録を持っている。

雨が降ったらその方が珍しいのである。

そんな場所に確かに雨よけの屋根はいらない。せいぜい太陽の光を遮れればそれで十分なのだ

彼らは古代からそうやって家を建ててきたわけである。

さて、この合理性を是とするか、それとも近代化していないと見るか、それはまあ、人それぞれだろう。

今回エジプトを旅していると、そういった、昔からのものが当たり前のように現代と混ざっているのに、少々考えさせられたところはある(うわー、めずらしくまじめなコメントだ)

列車は予定より1時間遅れで(午前10時)アスワン駅に到着。



この街はかの有名なアスワンハイダムのあるところである。

が、アスワンの観光は後回しで、この日はそのまま今度はバスに乗り換えて、エジプトをさら に南へと下る予定である。

行き先はエジプトの最南端、スーダンとの国境近くのアブシンベル。

そこになにがあるかというと……それは行ってのお楽しみ。

さて、バスは11時に出る予定なので、それまでの時間を利用して、アスワンにある古代の石 切場を観光した。

ギザで見たクフ王のピラミッドや、その他のピラミッドも、中にあった石棺はアスワン製の御 影石でつくられている。

つまり、アスワンから切り出された石が800キロの距離を運ばれたわけである。

どうやって?というとそれはナイル川を使ってだ。

石棺だけでなく、もっと巨大なもの、例えば、長さ30メートルの一枚岩のオベリクス(石塔)もここから切り出されて運ばれたのである。

古代の石切場には、作りかけのオベリクスが横たわっていた。



(途中でひびが入って放置されたオベリクス)

さて、アスワンから南のアブシンベルまで約300キロ。バスで4時間ほどかかる。 この移動が、またエジプトらしかった。

なにかというと、コンボイというシステムを取って移動するのである。

コンボイといっても見上げるように巨大なトラックで行くわけではなく、

観光バスが一緒に集まって(この時は30台程度が一緒だった)移動し、

その前後に警察の車両が護衛につくのである。

これは、エジプトの事情が色濃く出ている。

エジプト国内の治安はすごくいい。街を歩いていても危険を感じるようなことはなかった。 アメリカのその手の場所よりはずっと問題なさそうである。

それでも、この国には中東問題に起因するテロの危険がある。

10年ほど前には、実際にテロが起こった。(実はその起こった場所にも行ったのだけど)

エジプトの重要な産業は、一番が観光である。次に農業、三番目にスエズ運河だ。

だから、観光がテロの標的にされることもある。

そういう意味で、旅行には注意を払う必要があるのはほんとうだけど、エジプトの方もその重 要性をよくわかっている。

そのため、観光客を守る政策をいろいろと採っている。

例えば、エジプトには一般の警察の他に「観光ポリス」というのが存在する。 観光地などに行くと、黒い制服を着た「観光ポリス」のお巡りさんが必ず立っている。



(クフ王のピラミッドの観光ポリスのおっちゃん)

しかも、かなりの人数だ。ギザのピラミッドなどは視界にお巡りさんが入らない方が珍しい。 時には抜き身の(?)ライフルを肩から下げていたりする。

が、観光客には総じて愛想がすごくいい。話しかけると相手をしてくれたりする。

また、観光場所の入り口、ホテルの玄関などには必ず金属探知器や×線透過装置が用意されていたりする。

それと同じように、このバス移動のコンボイシステムも、

砂漠の道を300キロ走る際の危険を避けるために、採られている方法なのである。

バスは砂漠の道をノンストップで爆走した。 途中蜃気楼が浮かび上がる。



まさにアラビアンナイトの世界。 そうして午後2時頃一行はエジプトの最南、アブシンベルへ到着した。

エジプトでもっとも有名な王は誰だろう?

ギザのピラミッドのクフ王? きらびやかな副葬品のツタンカーメン王? それとも、クレオパトラ女王? 現在なら、そうかもしれない。

でも、古代エジプトでもっとも偉大な王として知られるのは、ラムセス2世である。

エジプトの古代史をおおざっぱに示すと三つの時代にわかれ、

古王国時代・紀元前3000~紀元前2000年頃

中王国時代・紀元前2000~紀元前1500年頃

新王国時代·紀元前1500~紀元前400年頃

ピラミッドがさかんに造られたのはもっとも古い古王国時代。

中王国時代が500年ほど続いたあと、新王国時代となる。

ラムセス2世が生きたのは、紀元前1300~1200年頃、新王国時代のことだ。

それは、エジプトのもっとも繁栄した時代といえる。

その頃の王都はあとで訪れることになるテーベ(現在のルクソール)で、

その富と繁栄は、ギリシャのホメロスの叙事詩『イーリアス』にも語られている。

ラムセス2世は異例の王だ。

身長は183センチ(当時の平均・160センチ)、

24歳で即位し、当時のエジプト人の平均寿命が40歳足らずなのに、90歳まで生きた。

そのことは、彼のミイラによって証明されている(カイロ博物館で見ました)

その武勇は並ぶものがなく、彼の強弓は他に引けるものがいなかった。

治世の最初は、東方のヒッタイト人との戦いに明け暮れた。

現在のシリア付近でおこなわれた戦闘は、エジプト軍の苦戦を彼の武勇が救ったと伝えられている。

幾度ものヒッタイト人との戦いの後、双方、和を結ぶにいたる。

これは文章で交わされた世界最古の和平条約ともいわれている。

東を安定させた彼は、次に南に向かった。

アスワンより南は、ヌビア人の地であり、その当時エジプトの支配下ではなかった。

彼はヌビア人を平定し、その地をエジプトの領土に加えたのである。

これにより、エジプトは東は現在のイスラエル・シリア、南はスーダンを含む最大版図を持つ にいたる。

彼はまた、エジプトじゅうに多くの神殿と自身の石像をつくった。

だから、エジプトでは何処にいっても、彼のつくった石像を見ることが出来ると言われている

なぜ、そんなに多くの石像をつくったのか?

自己顕示欲が強かったのか?

それもあるだろう。

でも、実はもっと切実な想いからなのだ。

なぜかというと、自分の像を造ると言うことは、

古代エジプト人にとって非常に重要なことだったからだ。

古代エジプトでは、死後の復活再生が信じられていた。

そのために彼らはミイラをつくったのである。

それは、復活したときに帰る器であった。

でも、もし、ミイラが失われていたらどうするのか?

その時、自分の像があれば、魂はそこに帰ることが出来ると考えられていた。

だから、像には必ず自身の名前を刻んである。王の場合は、生前名と即位名の両方を刻んである。

そうしておけば魂が迷わず帰ってこれると考えたのだ。

では、その像がなくなったら?

ラムセス2世は自分が必ず復活再生できるように、いくつもの像を造って、その紛失に備えた のである。

この辺り、ラムセス2世の生への執念のようなものを感じる。

ちょっと違うけど、中国秦の始皇帝が、不老不死の秘薬を探し求めたような……。

さて、アスワンからバスを連ねようやく着いたアブシンベルには、

そのラムセス2世がつくった巨大な石像と神殿がある。

それがアブシンベル神殿である。

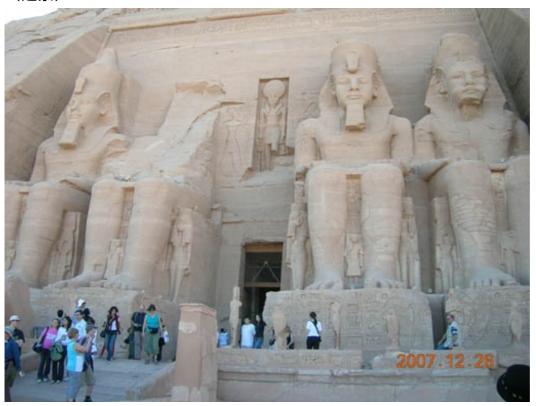
これがまたでかい!

遠くから見えてくると、おー! と思うし、近くによっても、はあー! と見上げちゃう。

(遠景)



(近景)



正面にある4体の像は、みんなラムセス2世の像で、

左から、少年期、青年期、壮年期、老年期の像になっている。

また、この神殿の内部のレリーフにはラムセス2世がヒッタイト人と戦ったときの様子が描かれている。

その中で、彼は後ろ足が4本ある馬(それだけ速かったということ)の曳く戦車に乗って、その強弓を引いて戦っている。

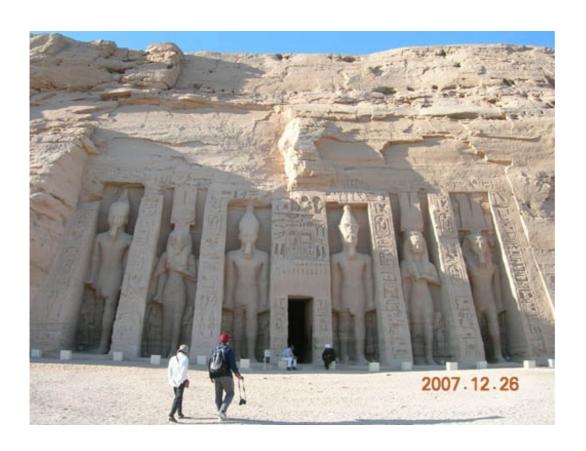
レリーフには、はっきりと美しい3000年前の色がそのまま残っていた。

この神殿は、実はアスワンハイダムのために湖の下に沈むはずだった。

それをユネスコが中心になって各国の協力で50メートルほど移動さし、今の場所に移したのである。

それはユネスコの世界遺産制定のきっかけとなったエピソードでもある。

またその傍らには、彼の最愛の妃ネフェリタリのためにつくられた小神殿(いや、小さくないんだけど)が並んでいる。



ラムセス2世という人は、一説には30人以上の妃を持ち100人以上の子供を持ったらしいが、その中でも、ネフェリタリは特別であり、「そなたのため、太陽は煌めく」などと讃辞を残している。

ところで、この観光をしている辺りから、奥さんが体調を崩した。 体がだるくて、関節が痛いという。 それは、風邪かなあ? 大丈夫?

などといっていたのだが、実は、自分も無事では済まなかったのである。

夜は、神殿でおこなわれる光と音のショーを鑑賞。 神殿の壁一面に映像が写し出され、ラムセス2世とネフェリタリの物語が語られた。



(三脚が無く、ボケボケの像)

この時は日本人が一番多かったので、音声は日本語である。

また、見上げると満天の星空。

普段日本ではオリオンぐらいしか見えないのに、いったいこんなに沢山の星がどこにあったのかというぐらいの星空。

たぶん4~5等星ぐらいまで見えているのだろう。

なんせ、オリオンのそばの昴もくっきり見えたのである。

宿に帰ってきたら、なんか、やたらと疲れている。

あれ?と思ったときには、奥さんと同じような症状になっていた。

そしてさらに……下痢症状が。

ああ、これは、やっちまったなと思った。

たぶん水にやられたのだ。

だいたい最初から、生水は飲まないでとガイドさんにも言われ、

歯磨きの水さえミネラルウォーターを使っていたのに、いったいどこで、やられたのか? 未だにはっきりとしたことは解らない。

ミネラルウォーターの回し飲みをしていたのに、子供たちはならなかったので、それが直接の原因ではない。とすると......。

一番あやしいのは、アブシンベルについての昼食で奥さんが頼んだグアバジュース。

これをわたしももらって飲んだ。

その日の夜に体調が悪くなっていることからも、これがあやしい。

とりあえず、風邪薬や下痢止めなどを飲んで就寝するも、結局旅の終わるまで体調は快復しなかったのである。

(いや、旅が終わっても快復しなかったんだけど・泣)

翌日の朝は、5時起きだった(!)

なぜかというと、それは日の出を見るため。

なんだか、わざとしたように、これから先旅程が厳しくなっていき、

それに合わせたように自分の体調も悪化して行くわけだが、この時はまだそこそこ元気だった

日の出はアブシンベル神殿の面している人工湖(ナセル湖)からあがってくるという。 さすがに朝の凍てつくような寒さの中、なかなか出てこない日の出を待っていると、 ようやく太陽が昇ってきた。



見え始めると見る見るうちに大きくなってくる。それと共に、寒さが和らいできた。

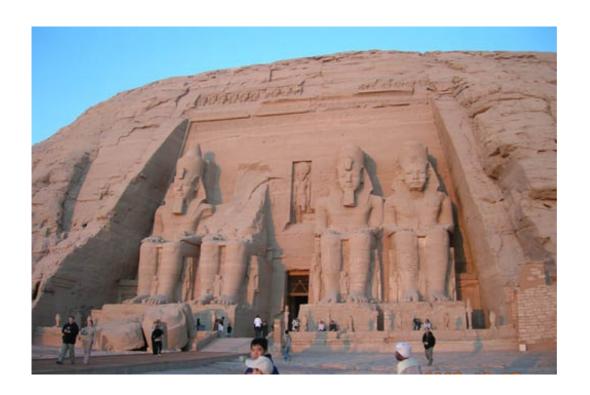
もし、ここを訪れるのが2月22日(もしくは10月22日)だったならば、

昇ってくる太陽の光は、神殿の最奥の至聖所(そこにまつられた神の像が安置されている)まで差し込んだはずだ。

それは、ラムセス2世の生まれた日と即位した日といわれている。

古代エジプト人の優れた測量術と方位の知識が、それを可能にしている。

(朝日を浴びるアブシンベル神殿)



さて、この日は再びコンボイによって、アブシンベルからアスワンへ。

昼前にアスワンに到着。

まずアスワンハイダムを見学した。

エジプトは「ナイルの賜」といわれる。

それはエジプトの国土の98%までが砂漠であり、ナイル川周辺でしか人が生活できなかった ことを表している。

ナイル川はエジプトの国土(砂漠)を1500キロに渡って縦に貫いている。

それは日本の本州を一本の川が流れているのに等しい。

実際には、ナイル川の全長は6000キロにもおよんでいる。

そのナイル川は、エジプトでは毎年夏に洪水を起こしていた。

古代には、その洪水のおかげで農地が潤って食物を育てることが出来、

洪水後の農地整備のために測量術が発展した。

だが近年では、やはり洪水は被害をもたらすものとして、その治水のためにダムが造られたわけである。

それがアスワンハイダムだ。

その水は、さらに灌漑用水と発電のために使われている。

アスワンハイダムによってせき止められ出来たナセル湖には、いくつもの観光船が浮かんでいた。

ここはナイル川クルーズの一つの起点なのである。

ここから、上流アブシンベルや下流ルクソールへ行くクルーズが存在する。 ここで、僕らはファルーカと呼ばれる帆船で湖の遊覧をした。 けっこう大きな帆船だ。大きな揺れはほとんどなく、ゆったりと進む。



ちなみに、船から見えたこのホテルは、アガサクリスティーが「ナイル殺人事件」を書いたホテルらしい。



この日のアスワンは、暑かった。

まるで夏のような陽気。太陽の光が眩しくてじっとしているとじりじりと肌が焼けるよう。 でも、船の上は風が吹き抜け、心地よかった。

この船を操縦しているのは、ヌビア出身の人たち。

しばらくすると、手に持つ太鼓を出してきて、民族音楽を唱ってくれた。

その『オー! アレーリ』という掛け声が繰り返される独特の調子は今でも耳に残っている。 そのあと、エジプト人のガイドさんからのリクエストで僕らも日本の歌をお返しすることに。 さて、なにを?

普通、こういうとき日本人はけっこう困るもんだと思うのだが、さすがに関西発のツアーのみなさん。

何日も一緒に旅をしてきた気安さもあって、誰かの提案にすぐ決まった。

それは、「かえるの歌」

もちろん3パートに別れて輪唱。

エジプトで響く「かえるの歌」って、どうよ? (笑)

さて、ナセル湖の中には水没を免れた島が幾つも点在している。

そんな島の上には遺跡が残っていたりする(実際には水没から救うために島に移されたものも ある)

午後は、そのうちの一つ、イシス神殿の観光。

イシスとは再生の女神のことだ。

巨大な壁に掘られて神のレリーフが綺麗だった。



ただ、だんだん体調が悪くなってきていた。

体がだるくて、立っているのが苦痛に。

奥さんの方は、少し回復したようだった。

実は午前中、添乗員の方に相談して、奥さんは薬(エジプトの)をいただいて飲んだ。

僕の方はその時はまだそれほどひどくなかったのと、けっこう強い薬だということなので、薬 をもらわなかった。

この判断が、後々まで響くことになる(泣)

この日は、アスワンで宿泊。

明日はエジプト観光の最後の地、ルクソールへ向けて移動する予定である。

体調不良 治らずとも 旅はつづきぬ (詠み人知らず・笑)

さて、エジプト観光も残すところあと二日。 相変わらず腹具合は悪いが、今日もガンガンいくことになる(泣)

旅の前半、ピラミッド三昧の日があったが、この日はさしずめ神殿三昧の日。 朝からアスワンを出て、北の方ルクソールまで200キロほどの移動だが、 その移動のあいだにまず、二つの神殿を訪れた。

初めは、コム・オンボ神殿。

エジプトには珍しい2つの神をまつる神殿らしい。

そのため左右対称の構造と、二つの至聖所(神像安置所)を持っている。



そのうち一つは、ワニの神(セベク神)。 だから神殿にはワニ飼育用プールや、ワニのミイラがあった。

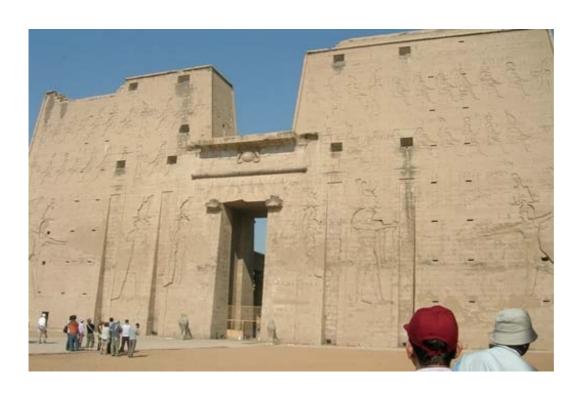
(これ)



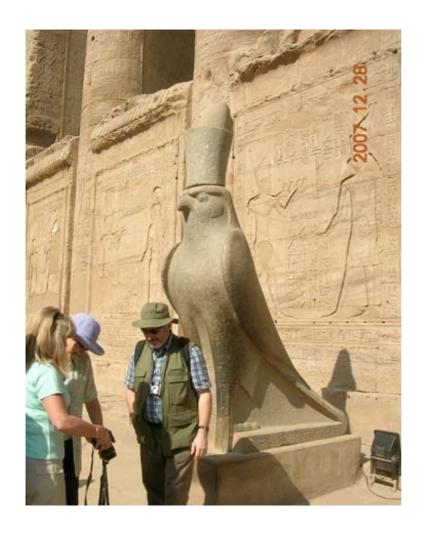
またこの神殿には、ナイル川の氾濫具合を測るためのナイルメーター(たぶん水位を測る)井 戸みたいなものもあった。

さて、もう一つの神は、ホルス神と言って、ハヤブサの姿の神なのだが、 これについては、次の神殿で述べよう。

次に訪れたのは、その名もホルス神殿。



神殿の前にかわいいハヤブサの像が建っている。



ホルス神は、エジプトでは人気のある神で王家の守り神だ。

彼は、オシリス神とイシス女神の息子である。

古代エジプトの神話では、オシリス神は、兄弟のセト神に妬まれて殺される。

その体は幾つもの断片に斬られて、ナイル川に捨てられてしまう。

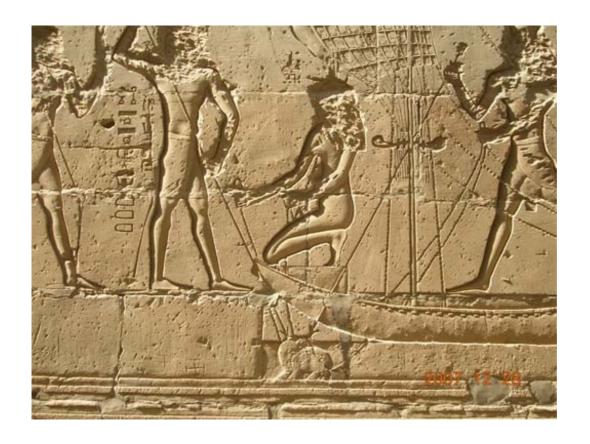
オシリスの妻イシスは、その体を集めて縫合し、黄泉の世界に行ってオシリスを呼び戻すので ある。

そして彼は復活した。

そのため、オシリスは死者を黄泉に導く神として、またイシスは再生復活の神として崇められた。

さて、そのふたりの子であるホルスは、叔父のセトを許すことが出来ず、彼を成敗するのである。

その様子が、ホルス神殿のレリーフに描かれている。



セト神はカバの姿で表され、ホルスが船の上から彼を串ざしている。

(ちなみに、もし遊戯王というまんがをご存じなら、なぜ海馬セトが遊戯の敵でありライバルなのか、これでわかる?)

バスは昼過ぎに、ルクソールに到着した。

ルクソールは新王国時代の首都であり、当時はテーベと言われた。

その地は、ナイル川を挟んで東側は生者の街であり、日の沈む西側は死者の街と呼ばれる。 実際、東側には大きな二つの神殿があり、西側の王家の谷には歴代の王が眠っている。

そのナイルの東側、まずは、カルナック神殿から観光した。

(そびえ立つ門壁)



(数多くの巨大な柱)



(そしてオベリクス)



この神殿は、新王国時代の歴代の王が、造り続けた大神殿だ。

ラムセス二世も、ツタンカーメンも、ハトシェプスト女王も、どこかの部分を造っている。 それだけではなく、あのアレキサンダー大王も、一番最奥の建物を築いている。

なんと、ここでこのエジプト旅行の最初の地であった、アレキサンドリアと最期の地であるルクソールが繋がったのである。

やるなあ、○TB。そこまで考えていたとしたらえらい(まさかね・笑)

さて、中庭には石柱に乗っかった大きなスカラベの像があった。



なぜだか観光客がその周りを回っている。なんで?

ガイドさんによると、そのスカラベの周りを回るといいことがあるという言い伝えがあるという。

曰く。

3周すると幸せになる。

4周すると希望が叶う。

5周すると結婚できる。

そして、6周すると離婚できる。らしい(笑)

さっそく僕らも周りを回る。

僕は3周でやめたけど、あ、奥さん、ストップ。6周まわらないで~。

さておき、

日が落ちてから、今度はもう一つの巨大神殿、ルクソール神殿に行った。 ライトアップされた神殿は美しい。

(ラムセス二世の巨像と、巨大なオベリスク)



実はここのオベリスクは2本立っていたのだが、そのうちの一本は今はエジプトにない。 しからば、どこにあるかというと、フランスはパリのコンコルド広場である。 パリに行った人ならば必ず見ているであろうエッフェル塔のすぐ近くに立っているのだ。 これは、フランスが奪っていったわけではなく、

当時のエジプトの王様が、フランスから大きな時計塔を送られた返礼にあげてしまったのである。

一説には、当時のフランス皇帝ナポレオン3世がどうしても欲しがったという話だが。 そのため、巨大なオベリスクはフランス海軍の戦艦に乗せられ運ばれたのである。

他にもヨーロッパにはエジプトのオベリスクがたくさんあり、その数は、現在エジプトに残っている数より多いという。

だいたい、ヨーロッパ人はエジプト好きだ。特にドイツ人やフランス人。 今回の旅行の間も、あちこちで見かけた。 実際エジプトを訪れる観光客の一番は、ドイツ人らしい。 考えてみれば、ヨーロッパからエジプトは、地中海を越えればすぐ。 僕ら日本人が中国の万里の長城を見に行くぐらいの感じだろうか? ちなみに、日本人観光客数は10位ぐらいになるらしい。 世界に冠たる旅行好きの日本人にも、エジプトはやはり、はるかに遠いのだ。 いよいよ観光の最終日。

なのに(なので?)5時起きなのである。 もうね、気力だけですよ。はははは(力無い笑い)

最終日はルクソール西岸の観光。 そこに何があるかというと、有名な王家の谷。



草一つはえていない乾燥した谷だが、そこには新王国時代の歴代の王の墓がある。

(谷を空から観光するための気球が沢山飛んでいた)



古王国時代の王たちはピラミッドを造って墓にしたけれど、全て盗掘にあってしまった。 そこで新王国時代の王たちは、この谷の地下に墓を造って盗掘者たちの目を欺こうとしたのだ

けれど、それもほとんどが失敗している。 唯一の例外が今の所ツタンカーメン王の墓なのだ。

現在までに見付かっている墓は64個。 多くの墓の長い通路には神々のレリーフがいまでも鮮やかな彩りで残っている。

(ラムセス4世の墓の入り口)



(ラムセス3世の墓の見取り図)



入場したラムセス3世の墓の玄室の天井には、

昼と夜を司るヌート女神が太陽を呑み込み、生み出すようすが、一面に描かれていた。 それは、死と再生の象徴。古代エジプト人の願いが込められている。

さて、ツタンカーメンの墓は、他の墓に比べごく小さい。



数メートル下りたところにすぐ前室があり、その先が玄室になっていた。

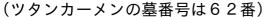
発掘された時、前室には数えきれないほどの副葬品が無造作に置かれており、

壁に隠された玄室を明けると、カイロ博物館で見た4重の厨子があったわけだ。

今現在、前室にはツタンカーメン王のミイラが安置され、

玄室には綺麗な赤銅色の石棺と、一番外側の金箔ばりの人型棺が残されていた。

特にその石棺は、まるで金属の銅でできているのじゃないかと思うほど綺麗な光沢とレリーフがされていた。





これはこの王家の谷で62番目に発見、発掘されたことを意味している。 逆にいうと、それ以降2つしか新たに発見されていない。 でも、エジプト学者たちは、まだまだ多くの墓がこの谷に眠っていると信じている。 僕らが行った時にも、発掘をしている現場を見ることができた。 そのうちツタンカーメン王の時ように、世紀の発見がなされるのかもしれない。

さて、最後の観光地は、王家の谷から山一つ隔てたところにあるハトシュプスト女王葬祭殿。 美しい3段テラス式の葬祭殿だ。



ハトシュプスト女王という人は戦ではなく交易によってエジプトを富ませた女王で、 その様子が葬祭殿のレリーフに掘られている。

(交易に使われた大きな舟)



キリンやゾウ、香辛料などの交易品。

そして、相手国の王と妃のエジプト訪問の様子。それらが誇らし気に描かれているのだ。

そんな葬祭殿の上からの眺めは、広々としてなかなか綺麗だった。



しかし約十年前、エジプトで起こったテロは、ちょうどこの場所、ハトシェプスト女王葬祭殿 で起こったのだった。

それはその治世中、戦をしなかった女王とはまるで相容れない行為。 それを思うとき、人間の愚かさをもまた考えさせられる。

最後に王家の谷への出入り口に立つメムノンの巨像といわれる2体の石像に別れを告げ



一行はついに帰路につくためルクソール国際空港へと向かったのである。

アメリカのナショナル・パーク(国立公園)の理念を表す言葉に、次のようなものがある。

とって(撮って)いいのは、写真だけ。 残していいのは、足跡だけ。 持って帰っていいのは、思い出だけ。

さすがは国立公園発祥の地であるアメリカの一つの良識を見る思いだが、 今回のエジプト旅行から、僕が持ち帰ったものは、もちろん思い出だけではない。

まず、お金を出して買った、つまり、お土産物は、 前に書いたパピルスの宇宙図の他に、パピルスの栞



ツタンカーメンの黄金のマスク絵のトランプ



磁石のステッカー



マグカップ



干したナツメヤシの実(あと残り2つだ!)



他にも、知人にあげてしまった物がいくつか。 まあ、これといって大した物は買っていない。 (間違っても20万円の絨毯なんぞ買わなかった)

お金を払ったという意味では、こういうものもある。

入場券(これはスフィンクスのもの)



エジプトの観光地の入場券はどれも様式が統一されていて、今回入ったところの券を全て並べるとこうなる



お金を払っていないけど、貰って来たものでは、 大理石のかけらと砂漠の砂



大理石は赤ピラミッドの近くの地面に落ちていたもの。 砂漠の砂はアスワンからルクソールへ行く途中の砂漠で採取。

ちなみに、撮った写真は約630枚。 一日平均80枚ぐらいだ(さすがデジカメ、楽ちん)

となるわけだが、もう一つ忘れられない物を持ち帰った。それは…… 『王の呪い』

……じゃなかった。いや、つまり、体調不良。これは辛かった。

症状としては下痢だけで、痛さも吐き気もほとんどなかったけれど、ひどい下痢。 栄養が吸収できないもんだから、段々体力が無くなって来て、 帰りの飛行機、ドーハでのトランジットのときは青息吐息。

日本に帰って水が変われば治りますよという添乗員さんの言葉を一縷の望みにして、日本に降り立った。

それが、12月30日。

ところが、31日、お正月と、症状は回復せず、

むしろどんどん悪化して、お正月の午後には何も食べられない状態に。

これは、ほんとに王の呪いか?

我慢できなくなってきたので、正月から近くの総合病院に駆け込んで、

診察してもらうと熱も38度を超えている。そのまま点滴。

まったく、お正月からなにしてるんでしょうか、わたし?

で、もらった薬が、吐き気止めと抗生剤と、なんとビオフェルミン。あの、下痢止めは? 「いやあ、無理に止めない方がいいですよ」とお医者様。

ほんとですかあ?

翌1月2日は、一日中起きられず。

でも、そのうちお腹がぐるぐる鳴りだして、2日の夜には症状が徐々に回復。

まじですか?

ビオフェルミン恐るべし。お医者様、疑ってごめんなさい。

ということで、ようやく、3日になって、起き上がれるようになったのでした。

よ、よかった。

でも、これって、まさに、寝正月(泣)

そんなこんなのエジプト10日間(エジプトには8日)

じゅうぶん堪能させてもらいました。

最後に、

ルクソール空港に向かうバスの中で、

旅行中ずっと一緒にまわった現地のガイドさんが、言った言葉で締めくくろう。

「エジプトには、『ナイルの水を飲んだ者は、ナイルに帰る』という言葉があります。

みなさんは今回ナイルの水を飲んでませんが、料理やミネラルウォーターもナイルの水で作られています。

ですから、きっとね、また、エジプトでお会いできるでしょう」